Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-17

金裕貞文学の翻訳Ⅱ ： 「チョンガーとカエル」「ノダジ(富鉱脈)」

朴, 鍾祐
石塚, 由佳

(Citation)
海港都市研究,15:81-100

(Issue Date)
2020-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81012003

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012003

金裕貞文学の翻訳Ⅱ

――「チョンガーとカエル」「ノダジ(富鉱脈)」[1]――

朴 鍾祐・石塚 由佳

(PARK, Jong Woo) (ISHIZUKA, Yuka)

1. 金裕貞の生涯と作品について[2]

金裕貞(1908-1937)は、1930 年代における韓国の農村やそこに生きる人々のあるがままの生きざまを伝統的情緒や生動感ある言葉とともにあらわしたことで高く評価される作家である。また金裕貞の作品には、彼の家族や故郷の人々、そして自分自身の人生が色濃く投影されていることで知られる。ここでは、金裕貞の生涯とその作家活動について見てみることとする。

金裕貞は、1908 年江原道春川シルレ村の裕福な家に生まれたが、6 歳で母を、8 歳で父を亡くす。その後、放蕩者の兄によって一家が没落すると、裕貞は姉や親せきの家を転々とした。彼は貧困に加え、自身の病や失恋により失意のどん底にあった 1931 年に故郷のシルレ村へ行き、貧しくも純朴な農民らの生きざまに感銘を受ける。この頃、彼は故郷で農村の青年らを相手に夜学を運営し、また忠清道の鉱業所で現場監督を経験している。その頃に出会った農村の人々や酒売りの女たち、鉱夫たちは彼の作品のモチーフとしてたびたび登場する。

1933 年、兄によって故郷の家産や墓までも完全に失ってしまったため、金裕貞は再びソウルに上京したが、彼は病の末に肺結核を患う。絶望的な状況の中で、彼はすがるように小説を書いた。同年には、「山里の旅人」や「チョンガ―とカエル」などを発表するものの、好評を得られなかったとされる。しかし、1935 年には「にわか雨」が朝鮮日報に一等当選、「ノダジ」が朝鮮中央日報に佳作入選すると、彼は一気に有名作家に名を連ねた。同年、九人会のメンバーに加わるとともに、多くの短編や随筆を精

---

[1] 原題は「총각과 맹꽁이」、「노다지」(全商國編『金裕貞　小説選集　山里の旅人』)。

[2] 全商國編集の『金裕貞　小説選集　山里の旅人』、300-319 頁。

力的に執筆した。彼にとって執筆は、過去の失恋や親族に対する鬱憤から解放される手段である一方で、治療費の捻出という側面もあり、困窮した生活のために書かねばならない事情があったとされる。そしてそのような絶望の中、金裕貞は1937年28歳という若さで肺結核により死亡した。

2. 作品について

日本で翻訳された金裕貞文学には、長璋吉訳の「椿の花」と「春・春」(『朝鮮短編小説選(下)』(岩波書店、1984～2000))と、白川春子訳の「山里」(『短編小説集　朴泰遠「小説家仇甫氏の一日」』(平凡社、2006))がある程度であった。このような翻訳・出版状況の中で、前稿では金裕貞の主要作品の一部である「山里の旅人」(1933)と「炎天」(1937)の翻訳を試みた。

本稿はそれに続いて、金裕貞の故郷を舞台にして書かれた「チョンガ―とカエル」(1933年)、彼の鉱山での体験を基に書かれた「ノダジ(富鉱脈)」(1935年)を紹介する。

一作品目の「チョンガ―とカエル」は『新女性』誌9月号に発表され、「山里の旅人」や「釜」といった作品同様に、ほぼ実話に近いと言われる。この作品は、日雇いの小作人ドンマニが、仲間に頼み込んで村に酒売りにやってきた女を娶らせてほしいと頼み込み一人奮闘する話である。主人公ドンマニが仲間から馬鹿にされ、裏切られる場面にカエルの鳴く様子が見事に調和し、金裕貞独特のアイロニーが提示される。

二作品目の「ノダジ」は、兄弟の契りを交わした主人公コンボとその兄貴分のトッポリが、金鉱を探しに険しい山に入って行く話である。二人は命がけの金鉱の仕事をしながらも時に慰め合い、時に助け合うが、いざ金鉱を前にした時に互いの気持ちに変化が起きる。当時の農村の貧しさに加え、人間の底知れない欲望と恐れと疑いの感情を鋭く描き出した作品である。

両作品とも金裕貞の巧みな言葉遣いや擬態語擬声語をふんだんに用いた彼独特の文学的表現は、1930年代の小説技法の中でも斬新なものとして一目置かれている。このことは読者にとって非常に興味深い反面、日本語に置き換える際には、彼の言葉の奥行きをどれだけ忠実に表現できるかが問われるといえる。本稿は金裕貞小説の深みにより近づけるように試みたものである。本稿が1930年代の朝鮮と金裕貞の文学世界をさらに知るきっかけとなれば幸いである。

＊金裕貞文学に関しては韓国国内でも編集されたものが多数あるが、本稿では、金裕貞文学村村長を務める全商國編集の『金裕貞　小説選集　山里の旅人[3]』を底本とした。

3. 作品翻訳

1) 「チョンガ―とカエル(총각과 맹꽁이)」

葉っぱたちが雨を待ち望んでいるが、今日もそうだ。草の葉は埃が白っぽく、ひらひらと揺らいでいる。からっとした空には、火の玉のような太陽が目を大きく開いた。

地面は火照って熱い湯気を顎の下に放っている。手鍬(てぐわ)を突き刺すたびに、蒸し暑い息をはあっはあっと吐きだす。日照りに粟の葉はなすすべもない。時々座り込んで草取りをする人の鼻やらまぶたを刺す。

手鍬は歪んでカンという音を時々出す。どこもかしこも刺さった石だ。普通の畑なら一度突き刺してめくれるだろうに、三四回しなければ土が起き上がらない。鼻筋から、顎から汗は水の流れるように落ち、手鍬の柄を濡らしてまた土に染み込む。

彼らは黙りこくっていた。粟畑の畝間(うねあい)にずらっと広がって刺さり、うなだれて這って行くだけだ。まるで地面を掘るモグラのように……。口を開ければ、汗もう一粒が流れるのを心配するのだ。

そうすると、どこからか話しかけてくる。

「わあ、熱っ、石を踏んで、ひでえ目にあったなあ。」

「こんなもんでも畑だといって、小作料の稲までふんだくるのか。」

「これからは死んでも、お前とは頼母子講の仕事はやらねえ。」と、一人の友人が怒ると、

「種の代金と小作料でちゃらにして、返しちまえよ。」

「こんなのでもないなら、食えるものくらいはないと！」

ドンマニは不安そうだった。手鍬を置いて、襟で顎をしごく。

そして、あちら側へぼんやりと顔をそむける。

過酷な小作料だ。うるち米三俵、麦、豆二袋の収量はかろうじて五俵。分けて食べることもできない。もともと畑ではない。老木のケヤキの影で遮られた、夏の日に行ったり来たりする農夫が休んでいた東屋(あずまや)だ。それを地主が無理に耕して、小作料を取る畑にしてし

[3] 全商國編集『金裕貞　小説選集　山里の旅人』、ヨニン M&B、2016 年

まう。豆を植えれば葉が出るのがやっとで、ほとんどが実らないのだった。仲間たちは日ごろ、ドンマニは間抜けだ、と畑に唾を吐いて非難した。しかしドンマニはむしろ駄目な豆のせいにするだけで、今年は粟に変えて植えるのだった。

「ちょっと休んでからしようぜ！」

一畝を終えてドンマニは立ち上がり、老木の方へ来る。それに続いて、汗をかいた奴らが、くたびれた様子で三々五々と集まってくる。石の上にしばらく座って休んでいると、ようやく生気が戻った。キセルを取り出し、くわえる。あるいはキセルを持って、タバコ一本くれと回って騒ぎ立てる。

「北風が入るな。今年の出来は、また無駄になりそうだ。」

方々の目が一斉に話すところを探る。そして、風になびく向こうの平野の青い稲の葉をじっと心配そうに眺めた。

まげを結った若者は、とてもひもじかった。別々に離れて、しゃがんで座った。

首をかしげて不平を言うのが並大抵ではない。

「ちくしょう、腹減って仕事ができねえ…」

「飢え死にしちまうよ。腰がぐんにゃり曲がっちまう…」

隣りで答える。

「汗水たらして間食もなしに働けるか？　たとえ振興会だけじゃなく、もっと偉いさんが来るとしてもよ…」と、またこぼすと、誰も反応がないので、

「何にもない奴に税（春と秋の２期に各戸が納めた租税）は納めても、間食さえ食わなけりゃ生きてられるとさ…」

口調を高め、周りの奴らに頷きを求める。

「お前はそれでも大丈夫だ。ドンマニが全部出すんだから。」

ごろつきのムンテは鼻をしかめて、あざ笑いながら見る。俺ら田舎者が騒いで何になる、それより……、

「なあ、今日そういえば酒売りの女が来たの知ってるか？」

この言葉に年老いたチョンガ―達は思わず耳をそばだてた。嬉しい知らせだ。

その口をしかと見つめ、話の続きを待つ。嬉しくもあるが、一方では疑わしかった。もっとも忙しい農繁期に何を期待して来るのか、と皆同じ質問だ。

それは聞いてか聞かずか、ムンテは木に斜めに横たわって、ぼんやりと空を眺める。そして一人で唾が乾くほど褒め立てる。

「白くて肌触りも良かったぜ。噛み砕いても生臭くもないだろうよ！　一番その頬っぺ

たの膨らんでるのが……。」

「歳は？」

「二十二、花盛りだぜ！」

「くっついてる野郎はいるのか？」

あちこちから、じわじわと突っ込んで聞いてくる。

「いねえ。夫を亡くしてから、投げやりになって酒売りの女として売り歩いてるところだってよ！」

「じゃあ、かなり売り歩きまくってんだな？」

「なに、歳を見なけりゃ。まだ新米みたいだぜ。」

「おお、良いなあ。一杯飲んでみようぜ。」

あちらこちらでささやく。豊作の年にでも当たったかのように騒ぎ立てる。片隅に座っていたドンマニが立ち上がってやって来ると、ムンテをぐっと引っ張って行く。ケヤキの裏に連れて来て、

「兄さん、旦那はいねえのか？」

「もちろん、本当だよ…」

「嫁を娶らせてくれたら、一席設けるよ。」

ムンテの顔色をうかがう。義兄だから言えないことはないけれど、それでもどういうわけか顔が赤くなった。

「心配するな。でも金がかかるぞ。」

小川を渡ってドンマニの母が来る。昼飯のかごを頭に載せ、暑くて疲れ切っている。農夫らは立ち上がって叫び、騒ぎ立てる。手鍬の柄を引き抜き、手鍬の背にキルグン楽(朝鮮時代の十二歌辞のうちの一つ)の調子を合わせる奴もいる。

「昼、昼だ。食わなきゃ生きられねえ！」

夕方になると風はそよそよと吹く。ムンテは自分の家の庭に麦わらのござを敷いて座り、仲間の来るのを待ちわびていた。ドンマニが一番先に大急ぎで走り出した。ムンテの横に来て腰を下ろし、少しためらうと、

「さっきの話ですけど。必ず嫁を娶らせてくだせえよ。」

「まあ、俺だけ信じろ。まさかお前に嘘つくかよ。」

「兄さんだけ信じるから、かならずそうしてくだせえ。」と念を押し、

「俺の、俺の鶏売って、休みの日(陰暦７月頃、農家で田の草取りを終えてしばらく休ん

で遊ぶ日）にきちんとお礼するから。」と、

また耳打ちでもう一度固く念を押す。

昼に耳打ちしてきた若い輩が一人二人集まる。約束通り、全部で六人になった。皆立ち上がって一塊となってひそひそと話す。大変なことでもしに行くかのように、こうしようああしようと意見が入り乱れ、定まらない。どうすれば金があまりかからないかが問題だ。俺たちがマッコリ三枡ばかり買って行こう、そうだ、女に注がせて後でいくらかやれば十分だ、というと、一方ではそうでなくその店に行って酒を思いっきり飲みほそう、そしてぱったりしらばくれて出てくれば、と言い張る奴もいる。しかし、ムンテは言った。女をうちの家に呼ぼう。焼酎三本だけ持って来いと言って、杯で注文するのが、一番大人らしい。

酒代は割り勘でしようか、あるいは数人が酒を引き受け、残りはつまみを払うかを話し合うとき、ドンマニは気前良く答えた。今夜の酒代は自分一人で全部おごると。それから鶏も一羽持って行くからどうか努めて良くしてくれとムンテにまた頼み込んだ。

ムンテは女を連れに通りに出た。ドンマニは少しも遅れずに来てくれるよう、念を押した。そして自分の家に向かって、小川の土手に上がった。

山のふもとに小川を隔てて建てられたその家は、部屋一間、台所一間のたった二間を石で積み上げて藁ぶきで覆った小屋のようなものだった。家族は母子（おやこ）だけ。息子が仕事に出れば、母も付いて早く出た。村を歩き回って、日雇いの仕事を探した。そして一日中穀物を搗（つ）く手間仕事でもらった飯を息子に食べさせ、寝るのが彼らの暮らしだった。娘は新郎の家から贈られた婚礼用の絹の織物（婚約期間中に男性の家から女性の家に贈るチマ・チョゴリ）をもらって置くが、息子の婚姻の予定だったものが、借金の穴埋めに知らぬ間に消えてしまい、

「それしきの嫁くらい、くだらねえです。」と、人にはそのように言ってのけたが……、

「いつになったら金ができて、嫁をもらうのか…」

内心は嘆きに堪えないはずだ。必ず嫁をもらわねばならない。

ドンマニは丘の下に靴を脱いだ。そして大きな体を丸めて、しずしずと家の中に入った。部屋の戸はぱたりと取れてしまって、家の中はがらんとしている。母は寝ている様子だ。鶏小屋の戸を注意深く開けた。手を突っ込み、手に触れるまま脇腹を軽くなでてやった。売って夏物の服（木綿で仕立てた半袖半ズボンの夏用服）を仕立てるための鶏だった。片手が素早く首をぐいっとつかむと、もう片方の手が翼の付け根をぎゅっと掴もうとする時、うっかり逃がしてしまった。一羽が飛び立つと数羽が羽をばたつかせながら、その一羽に

向かってコーコッコとしきりに鳴く。

「しっ！しっ！　こんちくしょうの×から生まれた猫野郎め！」と、母が追い払おうとして部屋から飛び出てくる気配だったが、

「もう追い出したべ。心配せず休んでくれよ！」というと、

「鶏小屋の戸をちゃんとくくっておきな。」

声だけで、また静かになった。

彼は重いため息をついた。鶏を脇に隠し、飛ぶように飛び出した。そしてムンテの家に走り出しながら、彼の頭には妄想が一つ二つではなかった。ムンテがきれいだと言う時は、相当美人の女にちがいない。こんな女と一緒に水商売をすれば、打って付けだろう。二年余り上手くやれば、牛一頭くらいは間違いなく手に入るだろう。そして息子もすぐ産まなければならないが、これが何より大きな心配だった。

ムンテはほろ酔い機嫌だった。酒売りの娘を一人抱きしめ、体を飽きるほど触りまくる。分厚い唇をゆがめ、

「お前、歌でも歌ってみろ。アリラン、アリラン。」

首を上下に動かしながら女の尻を叩く。狭い土間がいっぱいになった。お膳一つにかすかな灯りを真ん中に置き、酔った顔が哀れにもみすぼらしい姿できちきちに詰めて座った。皆一斉に目は女から離れない。

ぼろい叺（かます）（米を入れる袋）には蚤（のみ）が湧き、背中や脛をひどく噛む。しかし、掻くのは男の面子をつぶすことだ。ぐっとこらえて自分のところに女が来ることばかり目を赤くして待ちわびる。

「お酒ゆっくり注いでくれよ。」

「それ全部なくなりゃあ、何で遊ぶつもりかよ？」

「じゃあ、これで夜を明かすつもり？　なくなったら一緒に寝たら良いでしょう…」

女は流し目でにこりと笑って見せる。つられてぼーっと口が力なく開いてしまう。

顔の黒い奴が待ち構えては、マコ―（タバコの銘柄）一本を吸う。そして無理やりに引き寄せ、見せつけるように口付けをする。女は平気な様子でタバコを受け取り、吸ってはにこにこする。周りは腹わたが煮えくり返った。新式煙草の煙が酸っぱいだとか、どうせなら下着の中まで気前よく見せろだとか、とんでもない野次が飛んでくる。

「回せよ、回せ、独りだけ触りまくる気か？」

餓えたように四方からわめきながら、目を剥く。こんな張り詰めた状況の中で女は立ち

上がり、どこに行くべきかわからず酒瓶を持ってうろうろする。

ドンマニは一人離れて、土間の端に体をかがめて座った。何のかかわりもないキセルばかり石にしきりに叩きつけた。いくら待ってもムンテは自分ばかり遊ぶだけで紹介してくれない。酒代は自分が払うのに、女も興味がないのかこちらには目もくれない。それなのでずっと一言もかけられず、一人でやきもきする。

土間の下に白くて、細く可愛らしい靴が置かれていた。ドンマニはじっと見た。向きを変えて座り、誰かが見てはいないかと周りを探る。そして平べったい真っ黒な土の付いた足にその靴を履いてみては、この上なく喜んだ。

湧き水のようにすがすがしい夜だ。柳の間に月の明かりは透きとおっている。喉が裂けるほどカエルは歌う。雄と雌が睦まじく交わす愛の歌だった。

この歌を聞くと、突然怒りがどっとこみ上げた。今まで抑えに抑えてきたチョンガ―のさもしい鬱憤がことごとく爆発した。えい、くそったれみてえな人生が！と、自分の身を責めた後、女の前へ飛びかかってひざまずいた。両手を丁寧に膝の上に載せた。その行動があまりに気恥ずかしく並外れていたので、友人らは目を丸くした。

「さっきからお目にかかってはいたんですが、はじめてご挨拶いたします。」と、消え入るような声で無理に口を開いた。彼としては本当に大きな勇気だ。

「私は江原道春川郡新南面甑里の下の村に住むキム・ドンマンです。うちの父の姓が光山の金氏です。」

両手をしきりにこすり合わせると、

「母とたった二人家族です。ろくでもない人間を訪ねてくださり、本当にありがとうございます。私は三十四なのに独り身です。」

「？」

女は訳がわからず唖然としていて、

「以上でございます。」と、いいながら、額を傾けお辞儀をするのを見る時、我慢していた顔を思わず背けた。そして爆発しそうな笑いを食いしばったところ、くしゃみが出てしまった。

「いわゆる挨拶だってか？　何が以上でございます、だ。もっとやれよ！」

あちこちでくすくす笑う。そんな挨拶は後からしようと、野次が飛んでくる。

せっかくの挨拶が台無しだ。彼はその場で立ち上がることもできず、顔が赤くなり、首を垂れたまま仏像のようになった。

明け方だ。月が沈むと、外は黒い帳(とばり)が下りた。

三人の友は土間で眠りこけていた。酒に酔ったのではなく、あんまりにもしゃべり込んだので、その場の雰囲気に陶酔したのだ。ムンテ、ドンマニ、黒い顔、三人が向かい合って座った。それぞれが時々機会を窺うが、思うようにはいかず、気をもむばかりだ。

ムンテは女の肩を、がしっとひっつかんで左右に揺らす。実際は酔ってはいなかったが、独断の酒乱であり、発狂だ。ハイタカのように狙い、女の耳にすかさず耳打ちしては、その脇をぐいっとつつき、

「ああ、酔っぱらった。ちょっと小便してくるよ。」

すっくと立ちあがって、ふらつきながらしおり戸の外へ出て行く。しばらくすると、女までも用を足して来ると言って出て行ってしまう。

ドンマニはうらめしそうに眼ばかりぎょろつかせる。事がしきりに期待に反してしまう。そんなにまでも信じていたムンテも、自分が遊ぶことばかりに夢中でつまらない。そして小便を絞り出しているのか、いまだに戻ってこない。疑わしいことだ。彼はすっくと立ちあがり、扉の外に出てきた。

足もとが真っ暗だ。手探りしながら、納屋、稲むら、積み上げた木の塊の隙間をくまなく探し回った。再び引き返し、辺りの畝と畝の間を血眼になって探し始めた。

次第に夜が明ける。乳白色の澄んだ空が胸を広げる。きれいな峰、険しい峰、あちらこちらから一つ二つ、ぽつりぽつりと赤らんでいく。手のひらのような豆の葉は露を含んで生い茂った。かすめる間もなく、足にぴったりからみついて水を吐き出す。しばらく用を足した後、畑の真ん中の畝間に豆の葉に覆われた裾を見つけた。いきなり飛びかかった。

しかし、

「こりゃなんの真似です？　さっき何て言ったんです？」

と言っては、自分でも恥ずかしくて５、６歩手前の距離で足がぴたりと止まった。

義兄だと信じていたのが不覚だった。ムンテは少しもはばかりなかった。振り返りもせず、

「あっち行け。気の利かない奴だ。」

雷のように怒鳴る。むしろ責められて、呆れるほかない。話の出ばなをくじかれ、呆然とする。

「なんだよ、絶対結婚させてやるって言ったのがいつだよ？」

と負けずに声を荒げた。

（此間七行略[4]）

「酒代ください。帰るんなら…」と、

女が手を広げる時、

「俺と住まねえなら、酒代は出せねえ。」といって、最後まではねのけた。目は涙がにじんで、恨めしそうに女をにらみつけた。

女は酒を飲んで酒代を払わないとは何ごとだと、くどくど繰り返す。しまいには自分は酒を売りに来たのであって、あなたの妻になりに来たのではないと、たしなめさえした。ムンテはうるさかった。酒代は俺が出そうと女の腕を引っ張って、豆の枝をかき分けながら道に出てしまう。

異議を唱えたが、最後の計画も駄目になった。ドンマニはすっかり落胆し、豆畑の真ん中にぼんやりと彼らの後ろ姿ばかり見送る。女が道へ出るやいなや、血眼で待っていたもう一人の黒い顔がまた飛びかかる。

（此間四行略）

これを見ると、胸はさらにずきずきした。仲間がじっと見ている前で、引っ張っていくということはないだろう。涙はついにかさかさの口髭を伝って、足の甲へとめどなく転がり落ちた。

この家あの家から働き手が出てくるのが遠くに見える。仕事道具を手に畑へ、田んぼへ、めいめいに散らばって行く。ぱあっと明るくなってきた。

ドンマニはすぐに豆畑を飛び出した。納屋の横に飛び込んで、大きな石を掴み上げた。乾いた目をしばらく閉じている間に諦めたのか、畝間へ投げ捨てた。拳で涙をこすっては、

「一緒に暮らそうって言ったって、もう暮らさねえぞ！」と、納屋に向かって叫んだ。そして自分の家に向かって、肩を落として歩きながら丘を下って行く。しかしカエルは相変わらず声を高らかに鳴いている。畝間であざ笑うかのように意地悪く、「メーン」と投げかければ「コーン」と、なまめかしく歌い返す。

2) 「ノダジ（富鉱脈）」

みそかの漆黒の闇夜だった。

夜空に星はゴマ粒のように、ぎっしりと刺さっていた。そのおかげで松林の中はかろう

---

[4] 印刷過程で７行が省略されたことを表示。次の「（此間四行略）」も同じ。

じてぼんやりとしていた。険しい山中でも、さらに暗くじめじめして人里離れた隅っこにあるところだ。かさっと音がするだけでも胸がどきっとする。トラ、山奥のトラ！

周りは、しーんと静まり返っている。秋はすでに深まったとばかりに冷気は厳しい。露を含んだ枯れ葉は、ひらりひらりと舞い込んで顔を濡らす。コンボは頭陀袋（僧侶が首にかける袋）を枕にして、草の上に腰を曲げて横になり、しばらくうとうととした。再び目が覚めたときにはひどく身震いがする。兄貴は向かい側に、ただしゃがんで座っているようだ。

「兄貴、そろそろ始めてみましょうか？」

「まだまだだよ、休みながらやらなきゃ。」

暗がりの中でその声ばかりが力強く、しかし静かに聞こえるだけだ。道具を直しているのか、金槌の鉄のぶつかる音とともにごそごそと音を立てる。コンボはまた身をすくめ、丸まって目を閉じた。服は夜の湿った空気に濡れて、じっとりとしている。下半身がだらりと離れたように感覚を失い、しきりにうずくばかりだ。そのままぱっと起き上がり、あくびをしては、ぶるぶるっと震えた。

どこからかじゃりじゃりと去って行く足音が聞こえる。コンボははっと我に返り、目を丸くする。

「誰か来てるんじゃないですか？」

「風だろう、あいつらがまさか知るわけがないさ！」

気にしない素振りのその返事にいくらか安心する。傍に兄貴さえいるんなら、何人来ようともそう怯えることはない。チョゴリの襟を整え、ぐるっと見回した。

荒々しい大きな岩が、きらめく空を突き刺すように、にゅっとそびえていた。その両肩にある細々とした岩は、もくもくしたやつが黒い雲のようだ。そうすると今度は夢か虎か、わけのわからない険しい大頭が空にぬっと現れ、きょろきょろと見回す。四方は皆こんな山に取り囲まれていた。風はひっきりなしに転がり、湿気とともに落ち葉を散らす。もの寂しくも泉の水はゆっくりと、ちゃぷちゃぷ。すぐにでも真っ黒な山の中腹で虎の火が見えそうだ。どうすることもできない落とし穴に落ちたように、ぞくっと鳥肌が立つ。

コンボはあまりによそよそしくて寂しくて肩をぶるっと上げる。こんなに使い物にならない山奥もあるもんか。山奥という山奥、みんなこのあり様だってのか！　こうしていると、ひどく恐ろしい記憶が目の前をぱっとかすめる。

ちょうど昨年の今頃のことだ。あの日も今日のように夜通しでこっそりと採掘に行ったのだ。淮陽のあたりでも一番険しいという、ちょうどこのようにひっそりとして慣れない

山奥を這い上った。コンボにトッポリ、それから他の友だちの三人と、宵の口から降る小雨がどうしたことか止む気配がない。びゅーっと不意に立つ風に抱かれ、雨は落ち葉とともに体にぶつかり、またぶつかった。皆、口を開ける気力さえ失い、しきりにがくがくと震えた。今にも倒れて来そうな図体のでかい岩が頭をにゅっと突き出して、道をしっかと塞いでいる。そいつを抱えて真っ暗な崖を回ってみると、汗が背筋にすうっと流れ落ちた。

そのうえ、いつ虎が飛び出すか知れないので、胸はどきどきする。

しかし、それはそうと、今になって運良くもせしめた。ともかく五人が三十尋(約 50 メートル)を超える洞穴に入って、一時間もせずや鉱石を二袋は確実に取った。しかし問題は、分配にあった。どうやってこいつを分ければ互いに悔しい思いをしないだろうか。コンボは金鉱に並々ならぬ経歴があるだけに、あっさりと引き受けた。かさを見積り、五人分に順序通りそれぞれ均等に分けたのである。ところが、こんなこっけいな奴がまたいるだろうか…

「これで、ちゃんと分けたつもりなのか！」

暗い隅っこで、ある奴がこう突っ込むようなことを言うのだ。自分ではかっとしやすい性格を見せてやろうと、痰つばを吐く。

「それじゃあ？」

コンボはあまりにあきれて、そちらをじっと見やった。これは俺たちがいつもしているやり方なのに、今さら異を唱えることではない。

「なんだと、これが俺のだってか？」

「じゃあ、誰かがとんでもない目に遭ったって言うのか？」

「じゃあ、この坑を掘り当てたのは誰だってんだ？」

「誰が掘り当てたかなんて知るもんか、金があるから取って分けただけだろう！」

「知らないとでも言うのか？　俺がいなかったら誰が来れたって？　この野郎！」

「この馬鹿め、豚みたいに自分だけ欲張って、お前だけ取ろうってのか？」

他ならぬこの言葉に奴が、かっとして飛びかかった。粗暴な両手でコンボの胸ぐらを力いっぱい掴み、揺すってまくしたてる。コンボの体つきが小さく、しみったれだとあげつらって、ひどく見下した様子だ。

雨に打たれながら、ぎゅっと息が詰まるほど苦しめられると、コンボも腹が立たないはずはない。いつのまにか鉱石を手に掴むと、奴の頭を割った。そうすると、こいつがまるで牡牛のようにうーっというと、コンボを硬い石の上につまみ上げ、殴った。そして押さえつけて座ると、急に手鍬を持ち、ろっ骨をひどく殴りつけた。

死ななかったことだけが幸いだが、今でもこれが時々ぶり返して体が動かなくなるのだ。次には、左の肩をひどく殴られた。くらっとした。険しく深い山の中だから、そのまま殺してしまうつもりに違いない。三度目にまたもや胸をねらって下りてくる時、もはやもう死んだと思った。まったくぞっとする、ひやひやした瞬間だった。その時、天の加護か、門の扉のように大きくて頑丈なトッポリが、飛ぶトラのように飛んで来た。掴んだままそいつの腰を後ろへ両手で掴み取ると、山の斜面に放り投げてしまった。そいつがその時生きてるのか死んでるのか、すぐにはわからなかった。コンボはすぐに鉱石と一緒にトッポリの背に負ぶわれ町へ下りてきたのだ。

今のコンボの命は、トッポリの手から寿命をもらったその時の端くれだ。トッポリを兄貴と呼び、兄友弟恭の間柄をきちんと守っているのもこのような所以だ。

この山奥もそいつの山奥と何ら変わりない、ぞっとするような忌まわしい面持ちを持っていた。一度ぐるりと見まわしてみると、身震いしたその光景をまた思い出さずにはいられない。コンボはタバコばかりをすぱすぱ吸い、ぼんやりと座った。

「体ちょっとあっためて、そろそろやってみっか？」

トッポリも寒いのか、震える体をぽんぽんとはたいて立ち上がる。始められるように、道具は支度ができた様子だ。あちら側に行ってごそごそすると、袋からマッコリの瓶と豚足を取り出してこっちへ来る。

「でも、ちょっとくらい温めねえと。」と、彼は瓶の栓を歯で抜くと、

「まあ、そのまま食おうぜ、いつあっためて食うってんだ？」

「あっためましょう。」

「まあ、それも良い、だが火をつけてばれたらどうする？」

「あの岩の隙間で隠して、火を起こしましょう。」

年下のコンボは立ち上がって、枯れ葉をかき集めた。

兄貴は手探りで松の木の枯れ枝をぽきぽきと折って、一抱え持った。

屏風のように岩と岩の間に隙間ができた。その中に入ると、彼らは火をつけた。

「くー、うめえな。」

兄貴は一息に飲み干して、ほろ酔い気分だった。

刃物で豚肉を薄切りにして、くちゃくちゃ噛む。

「さっき、酒屋の女見たか？」

「なんで？」

「どうだった？」

「……。」

「しっかりもんだな、あれは！」と、彼は炎を前に瞬きしながら、にこにこ笑う。一年なら十二か月ひっきりなしに歩き回る身の上だった。今日は西へ、明日は東へ、朝鮮の金鉱という金鉱では、ちょっかいを出さないところはなかった。いつになれば自分も女一人出会って所帯をもってみるかと思うと、おのずと重いため息が出る。

「そりゃ、女のいるのがはるかにいいさ！」と自分でも照れくさいほど粋なことをいうと、

「そうですねぇ…」と、コンボはその顔をじろじろと眺めた。この日までいくら一緒に行き来していてもそんなことはなかったのだが、なぜ急に女のことを思い出すのか、どうしたことか。確かに、自分も最近突然そんな考えがむくむくと出てこないでもないのだが、秋が深まってきてなのか年を取った独身男が向き合って座っていると、出てくるのはそんな考えばかり。

「兄貴、嫁もらうんですか？」

「どこか女でもいるか？」

「さあ。」と、コンボはそんなことを立て続けに言った後、ふとこんなことを考えた。自分の姉をくれてやればどうだろうか。今その姉が忠州（チュンジュ）の辺りにある農夫に嫁入りして二人も子どもをもうけたが、とても上品な顔をしている。これをやるなら、兄貴はたいへん喜ぶだろうし、また命を助けてくれた恩返しにもなるのではないか。

「兄貴、うちの姉をくれてやりましょうか？」

「姉？」

「とってもきれいなんです。兄貴が見たらすぐ惚れちまいますよ。」

トッポリは次の言葉を待って、ただぼうっとしていた。炎で火照って赤黒いその顔には満足そうな笑みが浮かんだ。その姉についての誉め言葉は、前からよく聞いていた。その度に心の中では思うところがあったが、とうていこうだと打ち明けることはできなかったのだ。

「どうですか？」

「ううん、所帯のある人をそうできるのか？」と、言ってみながらも、恐る恐る聞いてみた。そうして、そそっかしく酒を注ぎ、弟分に渡しかけて器半分ほどもこぼしてしまった。

「そりゃ、奪い取っちまえばそれまでで、誰も文句言えねえです。」

コンボは自信があるように、こう宣言した。

トッポリはとても嬉しかった。腕を組んでは、目を閉じた。俺もようやく女一人抱いてみるんだなぁ！　おそらくその姉ってのは、とってもきれいなんだろう。ふっくらとして愛嬌がある女に違いなかろう。そんな必要もないのだが、彼はすっくと立ち上がってうろうろとしてから、またぺたりと座る。

「いつ行くんだ？」

「ちょっと待ってくだせぇ、これやってから明日行きましょう。」

今日の仕事だけ上手くいけば明日にでもすぐに発ってもかまわない。忠清道といっても江原道との境あたりを過ぎ、七八十里歩けばすぐだ。明日の日暮れまで歩けば、明後日の朝には姉の家に寄って、他の金鉱へ行こうと決めた。ところが、こいつめ、金はいつになったら取れるのか、気が遠くなるのだった。

「こんちくしょー、いつになりゃ運が向いてくるんだ！」

コンボはかぶりついていた豚の骨のかけらを放り投げて、こう嘆いた。

「心配するな、なんとかなるさ！今日は必ずノダジ(富鉱脈)を掘り当てるから見てろよ？」

「そうなればどんなに嬉しいか、だったら、それくらいで落ち着きましょう。」

「こいつがよ、こいつが使い物になるか、今になって。」

彼らは何度このように慰め合ったのか、数知れない。お前がノダジを掘り当てようが、俺が掘り当てようが、二人で山分けして、家を買って、女をもらって、酒も飲んで、楽に暮らそうと。しかし今まで一度でもそうしてみたことはないのだから、いつも戯言になってしまった。

「鶏が鳴く頃になったなぁ、もうそろそろ行ってみようか？」

トッポリはさっさと立ち上がって、荷物を背負いながらコンボを見た。体の具合がまた悪いのか、火の前でぶるぶると震えているのがあまりにも哀れだった。

「なあ、俺一人やってくるから、火でも当たってそこにいろよ？」

「何言うんです、行きましょう。」

コンボはよたよたと立ち上がって荷物を担いだ。

彼らは足で火をこすり消してからそこを発った。

山に谷を斜めに回りながら登る脇道があった。左右には松、松の実、栗、もみじ、こんな木々がぎっしり、鬱蒼としていた。その下には砂利や、でなければごつごつした岩が無分別にただ転がっていた。ただ真っ暗なその暗闇の中を、彼らは手探りで這い上がる。草むらの露で夏物の袴はじめじめと濡れた。脚を動かすたびに、ぴちゃぴちゃと肌にくっ

ついてぞくっとする。そして、残忍な風はひっきりなしに吹き下りる。ぶわっと勢いよく落ち葉を吹き下ろしては、またぐるっと力強く舞い上げる。

コンボはトッポリの後について登り、ぶるぶると震えた。これは悪ふざけなのか修羅場なのか。世の中で本当にやってられないものは金鉱を除いて他になかろう。金が一体何だというのか。こんな真似をしなければならないのか。その上、ともすれば殴り合って殺すことが常だ。まったく金鉱野郎に、一人だっておとなしい奴は見たことがない。体がしびれるたびにうんざりする過去をまた連想し、彼は再び身の毛がよだつ。すると、向かいの山の茂みで大きな明かりがちらついた。トラ！　こう驚いてトッポリの腰をばっと掴んで、

「ありゃ何ですかい？」と、ぶるぶると震えた。

「何？」

「あれ、いや、今は見えなくなったな。」

「そりゃ、目がぼやけて見間違ったんだよ。」

トッポリは後味悪そうに答え、何もなかったような素振りで登っていく。平然としたその態度に少し安心するようであるが、それでも安らかではいられない。なぜ今日はこうも恐ろしいのか訳がわからない。体はひどく疲れて、熱のせいで口がからからに乾く。これが普通なら、そんなはずはないのであるが、

「お前、だめだ、俺の背中に負ぶされ！」と、トッポリが背中を突き出すとき、彼は黙って頭陀袋の上にぱっと負ぶさった。それでも何も言わずがたがたと登っていくトッポリを眺めながら、丈夫なその体が羨ましいなんてものではなかった。

かんかん照りの真夏のように息を切らし額に汗がつーっと流れる時になってようやく、トッポリは山頂あたりまで至った。コンボを下ろし、汗をぬぐって、ふーっと息をつく。もうそんなに遠くないであろう。少し下って行けば、この下にあるはずだ。

彼らがこの村に寄ったのは、ちょうど今日の昼時だ。通り過ぎようとして、思いがけない居酒屋の主人の言葉にはっと気がそそられたのだ。あの山を越えると金鉱があるが、金がぽんぽん絶え間なくあふれ出ている金のなる木だと。最近は火薬の許可が下りてから仕事をしようとして、やむを得ずしばらく休坑中だが、すぐにまた再開するだろう。そして金泥棒に遭うかと思い、昼夜なく監視しているというのだ。

しかし、この夜中に誰が寝ずに、まさかと、トッポリはちゃかちゃかと下りていく。コンボはその尻をぐっと突っついた。でも人のことなので、もちろんわからない。左右を探りながらこそこそと用心深く下りてくる。

彼らは半分ほど下った。なるほど、大きな穴一つが現れた。

山の中腹に家ぐらいの岩が置かれ、その横にもう一つが置かれ、二手に分かれた。その真ん中にまっすぐに伸びる岩壁を挟んで、穴を開けたのだ。横の長さは一歩足らずで縦の長さは三歩ほど。町の明かりを照らしてみると、深さは四尋(約8メートル)を超えた。むやみに突っついてしまった穴なので、荒っぽく捨て石もきちんと片付けられていなかった。泥棒を心配してのことだろう。はしごはすっかり外され、つるつるとした石壁があるだけだ。

彼らは四方をもう一度きょろきょろ見渡した。近くさえも見分けづらいが、きっと人はいないだろう。安心して頭陀袋から松やにを取り出し、火を焚いた。トッポリが先に、壁に腹ばいになって後ろへ後ずさりして下りて行く。コンボは火を持ち、用心深く下りてくる。一尋(約2メートル)ほど残したとき、足がつるっと滑り、トッポリは落ちた。がんっ、とかなりひどい目には遭ったが、そのままぱっと起き上がった。夜が明ける前に早く金を取らねばならないのだ。

「おい、弟よ、俺はどこを採るんだ？」

「そうですね……ちょっと待ってくだせえ。」

弟は灯りを照らして、鉱脈を一度さっと見た。

金鉱のことには口八丁手八丁のあつらえ向きの金野郎だった。ぱっと見たところ、真ん中はすっかりなくなって、両端っこには少し鉱脈の筋があるのがわかった。

「兄貴はあっち側の隅を採ってくだせえ。」

コンボはこう指示し、自分はこっちの隅へ来た。しかし、どうしてもその隙間へ入る気にならない。見るに一尋ほどにも積みあがった坑木が、今にも倒れて来そうなほど危なっかしかった。下は少し小さい石で積んでいが、その上にはかなり大きな奴らが載せられていた。これが倒れれば、ぎゃっと叫ぶ間もなく、ぺちゃんこになって死ぬ。

コンボはしばらく考えたが、仕方がない。顔をしかめながら、頭陀袋から金槌と鑿(のみ)を取り出して持った。ところが、どうやって掘り出した穴なのか、へこんだ所は作業はおろか体一つ入る余地がない。やむを得ず両脚を坑木へまっすぐ伸ばし、体を溝へぴたりと付けて金槌で打ちはじめた。

石に開けられた穴なので、空気はさらにきーんとした。鑿を打つ音だけが両側の壁に重くぶつかる。

カン！カン！

と、ひどく耳に響く。

ほとんど一時間が過ぎた。彼らはありきたりの鉱石の他には何も得られなかった。また五分が過ぎる。十分が過ぎる。ちょうどその時だ。

コンボは汗をぼとぼとと流し、狭苦しいその隙間で鉱石一つを手に掴んだ。不相応に小さい木枕のような石ころを。腹ばいになったまま、灯りに映し、静かにくまなく探してみた。ぴかぴかした奴は、その光彩がとても紛らわしい。もしかして軟鉄ではないのか。彼は石の上に横たえておいて、金槌で叩いて壊してみた。めったなことでは割れないほど、ねばねばした金鉱石！彼は再びつまみ上げ目の前にぴたりと持って来て、細目を開けた。いくらかを穴があくほどに睨みつけた。むやみに胸は音を立て、ひたすら騒ぎ立てる。この石に差し込まれた金だけでも、知りはせずとも下等品十両ほどは超えるだろう。千ウォン！千ウォン！

「そりゃ何だ、何なんだ？」

トッポリはこうあわてて飛びついた。

「ノダジ。」と、しょんぼりとした答え。

「うううん、ノダジ？」と、言うやいなや、トッポリは恐る恐るその石を持ち上げて目に突き付ける。だらりとしなるほど差し込まれた金、俺たちもようやく月が回ってきたんだ！彼はふざけた尻踊りが自ずと出てくる。

「こっちへ出てこい、俺が採るから。」

彼は弟分の体をさっと持って外に出し、自分が代わりに入って行く。やはり足の甲に脚をさっと伸ばしては、その隙間にぱっと腹這いになった。体があまりにも大きいのでちょっとあたふたして掘っても、コンボより力があるだろう。その狭い隙間に鑿を差し込み、ふうふうと金槌でたたく。

コンボはその前に立ってぶすっとして、面白くなくなった。金鉱の仕事で言えば、俺が先生で、兄貴は自分の指示を受けてきたのだ。何を知ってて素人がもたついてるのか、石のかけら一つろくに取り出せないくせに……　彼は兄貴の態度が尋常ではないことが、ふとわかった。金を見るとはっきり変わる。

「あのつるはし、ちょっと取ってくれ。」

兄貴は頭も上げずに、むやみに叫ぶ。

コンボは黙って返事もしない。人を見下すそのざまがとても鼻についた。

「おい、コンボ。つるはしちょっと早く取ってくれよ、なんでぼうっと立ってるんだ？」

そして目をむいてにらむ。コンボはしのごの言わず、あちらの隅に置かれたつるはしを取ってやった。そしてぼんやりとまた立った。兄貴は無礼に振る舞えば振る舞うほど、そ

れはきっと示威に近かった。力がちょっとあるからって生意気に振る舞うその顔は、胸くそが悪くてそのままではいられない。

「また取ったぜ、俺の力どうだ？」

兄貴はこう得意になってべらべらしゃべり、つるはしを続けざまに打ち下ろす。まるでまぐさ桶に集まってくる豚のようだ。根気強くも手のひらほどの鉱石を二かけらも取り出した。これからは悪魔でなければ、どんなことがあっても取れないだろう。

えい！えい！えい！

それでも頑丈なこぶしで、固い岩石がぼこぼこと出る。

自分の力を大変自慢する兄貴をじっと見つめると、またその腹の中が見える。きっとこのノダジを独り占めしようというのだ。それなら俺がいるのをひどく嫌がるだろう、と気をもむ。

「これ見ろ、お前みたいなのは何百回来ても無駄だぜ。」と、また威張るときには胸がひやりとした。先頭に立つ兄貴の手に命を救われて来たが、今度は同じく山奥で、そのこぶしで命が終わるかもしれない。彼は兄貴のこぶしを黙って見下ろしながら、かわいそうにも骨と皮ばかりの自分のこぶしと見比べて見ずにはいられない。しかし、ただ胸の内はわなわなと震えるばかりだ。

その途端、コンボはあっと驚き、後ろへ後ずさった。うわっ、という思いがけない悲鳴とともにがらがらと鳴った。積み上げた坑木がどうしたことか、ばったりと崩れ落ちた。鋭く角ばった石がトッポリのふくらはぎやら、太もも、尻までそのまま押さえつけた。肉はもちろん押しつぶされただろう。彼はうつぶせに倒れたまま身動きできず、痛みに耐えられず、うんうんうめく。けれども、死ななかったことだけが幸いだ。すぐ上の空中にはぞっとするほど大きな石が転がり落ちようと、その下を支えるほんの小さな石のかけらに引っかかって、まだ転がり落ちることができずにゆらゆらしているところであった。この石さえ打ち下ろせば、その下のそいつは、命はおろかこっぱみじんになるのだ。

「おい、おれの体ちょっと引っこ抜いてくれ。」

兄貴は体が使えず、死に行く声で頼み込む。そしてまた、

「弟よ、俺死ぬよな、なあ？」と、より一層断腸の思いでこびへつらう。首だけかろうじて上げただけで、それ以外は手さえ自由を失ったようだ。

コンボは倒れそうな坑木を見上げて、素早くその頭の下へ近寄って立つ。足の前に置かれたノダジの三片をすばしこく手に掴むと、もとの場所へ素早く後ずさった。そして涙を流す兄貴の顔は振り返って見もせず、あわてて障壁を這い上がる。

「この野郎！」

這い上がり、雷のようにわめきちらす怒号が聞こえた。また続けて、がちゃん、という恐ろしい爆音が聞こえた。それは、ほとんどほとんど同時のことだった。そうしてからは、少しぱらぱらとした後は静まり返った。

その時はもう二尋（約４メートル）も超えて、コンボは這い上がった。坑口まで出てきた時、彼は頭だけ突き出し四方を見回してから影のように消える。

トッポリの姿は見えない。どんよりとした暗闇の中で、ただ大きな石ころだけがごろごろと散らばっていた。こちらの坑道の行き止まりの焼け残った火鉢の火は、今まさに消え入りそうにちらちらしている。そして強い風がびゅうっと言っては、坑口あたりに砂をざら、ざらと、入れては吐き出すのだ。

朴　鍾祐（神戸大学国際教育総合センター／大学院人文学研究科）
石塚由佳（関西学院大学）